

論文の概要および審査結果の要旨

氏名（本籍）	竹内 正興（埼玉県）
学位の種類	博士（教育学）
学位記番号	甲第17号
学位授与の日付	令和2年3月18日
学位授与の要件	佛教大学学位規程第5条
学位論文題目	現代の大学入試における 不本意入学者
論文審査委員	主査 原 清治（佛教大学教授） 副査 篠原 正典（佛教大学教授） 副査 山内 乾史（神戸大学 大学院国際 協力研究科教授）

〔1〕論文の概要

本論文は、実態としての現代の大学不本意入学者の特徴を明らかにすることを目的としている。

これまでの不本意入学研究において、第一志望である大学に不合格となることが「不本意」としての入学者を生成するという一般的な知見に対し、本論文では、大学志望度と大学本意度の関係を統計的に分析し、不本意入学は志望順位に必ずしも強く依拠しない、という新規性のある知見を見出した点において学術的意義を有しているといえる。

また、不本意入学の定義について、志望順位と関連付けた先行研究が多い中、本論文では、いくつかの要因が複雑に組み合わさる不本意感について、先行研究では見られない「本意ではない」という直接的な用語と、「入学する大学に対して満足していない」という入学満足度の組み合わせを不本意入学の定義として設定し、不本意感を発生させる要素について、学習動機付けの要因、受験生が重視する合否を決める要素、高校生活の振り返り、アイデンティティの確立度という4つの観点から不本意入学者の特徴を実証分析によって明らかにした。調査結果から得られた特徴に当てはまる場合、不本意入学となりやすいことを結論とした点も、本論文の成果であるといえる。

以下に論文の概要を示す。

序章では、実態としての現代の大学不本意入学者の特徴を明らかにするという研究目的を示し、現代の大学不本意入学者の実態をテーマとして設定した問題意識として、①大学入試の選抜性の構造、②進学アスピレーションの分化による高校の階層構造の変化の二点を挙げている。

①の大学入試の選抜性については、多くの不合格者を生み出す入試制度の構造の中で、不合格者の不満をどう納得させるか、いわば加熱したアスピレーションを冷却するシステムの存否が、制度の維持を左右するという先行研究を挙げた上で、不合格者の多くは不満があっても負けたことを受け入れ納得してきたからこそ、入試制度は改変の歴史をたどりながらも制度自体を維持してきたとしている。

また②については、入試結果に対する不満は、不合格者に限らず、合格者の中にも存在することを指摘している。実際、受験生は偏差値によるランク付けに沿って第一志望、第二志望、第三志望という志望順位をつけて複数の大学を受験し、合格した大学の中で志望順位の高い大学に進学するケースが多いためである。その際、第一志望校に不合格となることが不本意入学となる一つのパターンであるというこれまでの知見に対し、本論文では、志望度と満足度が直接つながらない学生が増加しているという先行研究がみられることなどから、第一志望校の不合格者を不本意入学として捉えることには疑念が残ると指摘している。

そこで、本論文では、不本意入学は志望順位に依存するのかどうかを第一の問いとして設定し、調査分析より検証する。また、第二の問いとして不本意感を発生させる要素は何であるのかについて調査分析を行ない、本来、選抜試験の勝者であると考えられる合格者の中になぜ不本意と感じる者がいるのか、一方で、第二志望以下の大学に合格した者の中に本意だと感じる者がいるのか、について検討する。

具体的には、設定した問いに対して、

(1) 大学入試制度と学校歴社会の問題

(2) 教育の大衆化の問題

(3) 受験生（高校生）のアイデンティティ確立と高校における進路指導の問題

という3つの問題設定を行い、先行研究、ならびに、量的調査と質的調査を組み合わせた実証研究による検討を行っている。

第1章では、メリトクラシー（業績主義）の社会において、大学入試は、学校歴の獲得を目指す者たちを選抜によってふるいにかけ、多くの不合格者、すなわち、敗者を生み出す構造の中で、形式的な公平性と入試の結果を本人の努力不足に帰属させる努力主義によって敗者の不満を抑えこんできた構造を概観した。そして、この不満を抑え込む構造が入学する大学への不本意感の発生につながる可能性を指摘した。ただし、学歴主義の発生起源が、男子と女子では異なることから、男子と女子の学歴観は異なることについても言及している。

第2章では、まず教育の大衆化の中で、生徒たちは所属する学校（進学校など）で形成される規範的期待水準の中で、卒業後に進学することに納得できる大学群までアスピレーションを高める学校の空気と構造の中に置かれている。この学校の空気と構造は、教育の大衆化という集団の中で、偏差値を用いた細かな学校ランクによる傾斜的選抜システムによって強固な仕組みを形成している。そのため、規範的期待水準の中で高まったアスピレーションに見合う大学に進学できない場合、不本意感を抱きやすくなることについて論じている。

そして、中程度の選抜機能を有する大学新入生に対して、不本意入学に関する調査を行

い、調査対象校について、まず、不本意入学者が 40%程度存在するものの、寺崎（2010）が「日本の大学は不本意入学、不本意学生だらけである」という水準までは高いとはいえない結果を示した。次に、不本意入学者は、女子よりも男子の不本意入学者の割合が高い特徴があることを述べた。また、入学する大学に対して、学習内容に関連した動機付けを持っている者は不本意入学とはなりにくい結果を示している。

第3章では、高校の進路指導と高校生の進路選択について、自己選抜による配分機能がある中で、高卒就職と比べた場合、大学進学は制度的連結の機能が推薦入試の中の指定校推薦に限られるため自己選抜が働きにくく、配分の効率性が低下する可能性を指摘している。また、1990年代以降の受験人口の減少、推薦入試の拡大による受験教科・科目等の軽量化、さらに、メリトクラシーの再帰性によって、従来の進学校群の生徒たちの進学アスピレーションが分化し、高校の階層構造が変化したことを論じ、その結果、自己選抜機能に揺らぎが生じ、出身高校による不本意入学の発生状況に変化が生じていることを述べている。

また、現代の高校の進路指導において、配分機能が重視される背景には進路保障が重視されていることを論じている。この配分機能の重視は、大学進学を希望する生徒にとっても、第1章で指摘したように、選抜の敗者となり（または、敗者と感じ）、ヨコの学歴は獲得できなかったとしてもタテの学歴だけは獲得しておきたいというメンタリティが働くため受け入れやすい一方で、受験後の不本意入学につながりやすいことを指摘している。

第4章では、受験生が重視する合否を決める要素に関する調査より、不本意入学者は、入試の結果を安定性がない（変わりやすい）「運」や「努力」と考える傾向があることを示した。このうち、「努力」については、女子のスコアが男子よりも高く（1%水準で有意差が見られ）、インタビュー調査からも「努力」の過程に納得していないコメントが見られた。そして、同じ「努力」でも、自分自身の「努力」の過程に納得できるかどうか为本意入学と不本意入学の分岐点となる可能性を論じた。

それは、続く第2節の高校生活の振り返りに関する調査において、不本意入学者は、本意入学者と比較した場合、高校時代に深い交友関係が築けていないという傾向が見られ、友人との深いつながりが高校卒業後の進学する大学への本意度に影響することを指摘した。また、進学校出身者と非進学校出身者の属性に分類した調査分析からは、進学校出身者のうち、特に、高校での成績が中下位層に位置していた者は、準拠集団で形成される規範的期待水準の大学に合格することが難しく不本意入学となりやすい可能性を示した。

そして、アイデンティティ確立度の項目における調査より、不本意入学者は本意入学者よりも、アイデンティティの確立度が低い傾向があることを明らかにした。また、男子の不本意入学者では自我と社会性の確立度の双方で、女子の不本意入学者では社会性の確立度で本意入学者よりも低い傾向が見られ、性別による特徴の違いを見出した。

最終となるまとめでは、不本意入学者の自己選抜の特徴に着目し、選抜性を有する国立大学への不本意入学者は、本意入学者と比べて、出願理由として入学後の学習内容に関連する動機付けを持っていない傾向が見られることを示した。この傾向は、第2章の学習動機付けの要因の調査結果と一致している。入学後に学びたい内容が明確になっていれば、たとえば、大学入試センター試験（共通テスト）後の自己採点の結果で希望していなかった大学に出願することになっても、入学することが決まった時に不本意感を抱きにくくする

可能性を示している。

論文全体を総じてみたい。

論文の構成は、第1章～第3章において、不本意入学の観点から大学入試を取り巻く構造と問題点を示した上で、第2章、および、第4章の実証分析によって不本意入学者の特徴を明らかにするものとなっている。

本論文において特筆すべきは、自身が実施した調査分析から、不本意入学は志望順位に依存しないことを明らかにした点である。これまでの研究において、第一志望校に不合格となることが不本意入学となるパターンの一つであるという知見に対し、学習動機付けの要因（第2章）、受験生が重視する合否を決める要素、高校生活の振り返り、アイデンティティの確立度（以上、第4章）という4つの観点から、大学志望度と大学本意度との関係を統計的に分析した結果、不本意入学は志望順位に依存しないことを明らかにしている。つまり、第一志望校に不合格であることが不本意入学ではないということである。

また、不本意入学者の特徴として、第2章では、前述の通り、学習動機付けの要因の調査分析より、「充実志向」、「訓練志向」、「実用志向」といった「内容関与的動機」、すなわち、入学する大学に対して、学習内容に関連した動機付けを持っている者は、不本意入学とはなりにくい特徴があることを明らかにした点にも見るべき長所がある。

〔2〕審査結果の要旨

本論文における新規性は、第一志望校に不合格となることが不本意入学のパターンの一つであるというこれまでの知見に対し、不本意入学は志望順位に依存しないことを明らかにした点である。その上で、本意度と入学満足度の組み合わせを不本意入学として定義し、不本意入学者の特徴を明らかにした点は本論文の成果であるといえる。

本論文は、日本の現代の選抜性を有する大学入試における不本意入学者の特徴の一端を明らかにしたことで、大学不本意入学者を減少させるという観点から、高校での進路指導や高大連携活動、また、大学入学後の不本意入学者への対応に寄与すると考えられる。

一方で、今後の努力課題にも言及したい。大学全入時代の中で、選抜性を持たない大学における不本意入学者の実態については、本論文では詳細な分析に踏み込めていない。また、日本と類似した入試制度を採用している諸外国の不本意入学者の実態に接近することで、不本意入学の日本的特質について外国の入試制度の違いと比較しながら、より多角的に分析できると考えられるが、本論文では日本国内の研究にとどまっており、日本的特質を論じるまでには至っていない。これらの点については今後の研究課題ではあるが、それをもって本論文の完成度を低めるものではないことを付言しておく。

以上、慎重に審査した結果、本論文は博士（教育学）の学位を授与するに相応しいと判断する。